

込んだ。池は荒れ、一面に地滑りが起き、池はなくなってしまった。付近の虫川はこの時から深くなり、先途に三軒あつた家も一軒になった。

伝説は虫川が深くなったことと、先途の家数が少ない説明になっており、その理由は池の主の蛇が原因でナギが起きたということになっています。地滑りの原因は池の水が流れたためです。これは蛇抜け災害ということができましょう。

これまで見てきた伝説などから、大雨をもたらすことができる、池や川などの水を統御できる神の化身として大蛇Ⅱ竜が考えられていたこと。そしてその水を統御する能力のゆえに、洪水も竜が引き起こすと考えられていたこと。竜が洪水を引き起こす理由としては、竜の個人的な人間との関係とともに、竜そのものが住家をかえたり、天に上ろうとするようなときもあると考えられてきたことがわかったと思います。

もし洪水や蛇抜けがこのようにして引き起こされるのだとすると、その対策は竜に対処するものでなくてはならなくなります。ともかく、天竜川沿いに洪水などは竜がもたらすのだという考え方が色濃くあつたことは確実です。

第五章 水害への対処

これまで、天竜川沿いの水害について、伝説を素材にして考察してきました。では、天竜川沿いに住んだ人々は水害にどのようにして対処しようとしたのでしょうか。現代では治水といえれば堤防の構築などが主体です。しかしながら、前章で見てきたような、竜Ⅱ大蛇が水害の原因だというような考え方が強かった時代には、堤防以上に重要だったのはそうした竜を、どのようにして押えるかということだったと推察されます。そこで、最後に同じく伝説などを通じて天竜川沿いの人々がいかにかにして水害を避けようとしたかを、主として住民の精神的な面に光を当ててみたいと思います。

「水神を祭る」

水害が水を司る神である竜によって引き起こされるといふことならば、水害に対処するには私達とは異なる世界の住人である竜をも従えうる力のあるものが必要になります。

そのために想定されたのが水を押えることのできる神様です。以下、そうした水害から守ってくれる神様について確認してみましょう。

(イ) 弁天の森の弁財天 (下伊那郡波合村)

享保六年(一七二一)の大水害は当村に大きな影響を及ぼすものであった。(中略)四十七軒あった町並のうち、半分以上の二十九軒が流失したというのであるから、当村にとっては大変な大水害であった。この水害のため、町頭にあった関所が現在地に移転されたのであり、同八年に弁天の森に水難鎮静を祈って弁財尊天が祀られたのであった。―『波合村誌』五一―八頁・波合村誌刊行会・一九八四)

ここでは大変な水害の後に、水難の鎮静を祈って弁財天が祭られたといえます。弁財天は元来、インドの河の神として崇拜された神です(『日本宗教事典』四〇〇頁・弘文堂・一九八五)。江戸時代には元の姿が蛇神であるということから、水の縁の深いところに祭り、卵を供えたり、蛇の彫刻をしたりしました(関口正史・中尾堯「弁才天」・『大百科事典』第一三卷六七―八頁・平凡社・一九八五)。右に見られるのは、そうした河の神として弁財天を祭り、そ

れによって洪水を押えてもらおうという思想です。

(ロ) 寛政五年(一七九三)の「下市田邑堤防之御銘」

(下伊那郡高森町下市田)

寛延戊辰(元年一七四八)堤堤を下市田邑に築く。河上旧と鍋弦の堤あり。歳々破壊し修起数々すれども新築を潰す。茲に旧堤と退く者若干歩。禹余石を本として河に順ふて斜めに築く。河伯を祭祠して禹余堤と名づけ碑を道傍若干歩の山下に立て事を記す。―『市村威人全集』第一―卷一四二頁・下伊那教育会・一九八一)

ここでは堤防を築き、河伯を祭ったと出てきています。河伯は河の神、水神のことです(諸橋轍次『大漢和辞典』卷六一―一六頁・大修館書店・一九七四)。堤防を守ってもらうために、水神が祭られたのです。

(ハ) 惣兵衛堤の天伯森

上の亀甲石の西南九十間を隔てた所に天伯様を祀る小祠があつて、周囲は大きい森になつていた。(中略)この祠も取入れ口や用水路の位置、規模を決定する基点であつたのである。―『市村威人全集』第一―卷一六六頁)

惣兵衛堤は宝暦二年（一七五二）にできあがりしました
『市村威人全集』第一巻一三九頁・下伊那教育会・一九八一、同『惣兵衛川除』建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所・一九九一）。前の河伯と同じものを指すのでしよう。この場合、その水神様が天伯だったというのです。天伯は天竜川流域に広く知られる神で、霜月祭りなどでも重要な役割を果たしています。治水の神様として重視されたものでしょう。

(二) 宝暦七年（一七五七）の満水（下伊那郡喬木村）

宝暦七年五月の満水には伊久間村も大被害をうけ村方七分が流れ、そのため川除三社を祀ったといわれる。――『喬木村誌』上巻五五一頁・喬木村誌刊行会・一九七九）この場合には具体的な神様の名前はわかりませんが、ともかく水害を避けるために川除三社を祭ったのです。

(ホ) 水神祭祀と百年記念碑建立（上伊那郡大鹿村）

弘化四丁未（一八四六）三月、開発発起人中尾中根明右衛門、文蔵栗山久蔵の名によって、島川原新田を水害から守るために、金毘羅大権現、法性大明神、九頭竜大権現を勧請し、石に刻して島川原水田仲間が祭祀した。

――『大鹿村誌』上巻六〇六頁・大鹿村誌刊行委員会・一九八四）

弘化四年に開発された島川原新田を守るために、金毘羅大権現、法性大明神、九頭竜大権現を勧請したとのことです。新田開発を行うようなときにも神の力は期待されていたのです。

以上は、年号の入った伝説です。以下もう少し一般的な話や、記載をこの地方の市町村誌類などから見ておきましょう。

(ハ) 洪水に対処する神（上伊那郡）

天変地異を天狗とか竜神とかの、超人的な所為と信じたのは原始信仰の名残である。町村誌の書き上げ中に祭神は不詳として、社名を天狗社としているのが七社もある。池の神社とか、池の明神とかしたのもある。その他の変移に神社を建てて神霊を鎮め、そうしてその神に依って異変から逃れようとしたのである。伊那市の新田は、三峰川が此所に来て広がり天竜川に合する沿岸である。そして東部山岳地帯の豪雨にはいつも洪水になる地籍であるが、常には広く豊かに展げた地であるから狐島等か

ら出て開拓したところである。しかし時折りの洪水氾濫には開拓農民も手のつけようがなく、自然のなすがまに任すより仕方がない。それでも最後に考えられたことは神を祀り鎮魂を祈ることであった。荒れ神といわれる須蓋鳴尊を祀る荒神社が六座もあり、水に関してか弁財天社が一座ある。―『長野県上伊那誌』第二巻歴史編一二八六頁・上伊那誌刊行会・一九六五

(ト) 天伯 (伊那市)

「さんよりこより」の踊りで有名な美篤の川手や、富島の桜井の天伯社の祭りは、応永年間(一三九四―一四二八)の洪水にまつわる縁起をもっていて、天伯は洪水除けの神として信仰されてきたという。―『伊那市史』通史編六三四頁・伊那市史刊行会・一九八四

(チ) 天白信仰 (下伊那郡泰阜村)

天白社(天伯社)の祭神は、天棚織比売命や瀬織津姫を祀る。いずれも七夕祭りの星祭りに因む祭神で、雨、水に関係を持つ神として、五風十雨の順調な天候とこれによる五穀豊饒を祈る神とされた。天白社の中には河童を祀るといふ土俗神もあるが、これも水を守る神として

信仰された。―『泰阜村誌』上巻四三二頁

(リ) 水に関する神々 (下伊那郡豊丘村)

人間生活上最も大切な火と水とは太古よりその神霊をみとめて、火の神、水の神として祀った。農耕上、水田、水利治水を守る神の信仰は特別篤かったようである。田村々の伝説に瀬分け鎌がある。洪水の時諏訪社の雑鎌を天竜川の瀬に立てて水の瀬分けを祈ったと伝えている。各村の堤防や出水には治水、水利の安全を祈る水神があり、早魃の雨乞に諏訪神社の御天水を迎えた。水神には九頭竜権現・水速女命・弁才天・水天宮・罔象女神・戸隠神社などが祭られている。水天宮は俗に安産の神としても祭るが、大体は堤防上や堤の岸にあって水防の神として祭ったものが多い。―『豊丘村誌』上巻六八八頁

(ヌ) 安永八年(一七七九)に葛上紀流が書いた『木の下の陰』に見える水神岩 (上伊那郡高遠町)

勝間村より下り口の河原にある大石を水神岩といふ―『路原拾葉』第九輯七八頁

(ル) 水神様 (下伊那郡鼎町)

水神関係の碑は、まず飲用水や灌漑用の安全と確保から、次に水難防止の願いから、さらに水難犠牲者の供養のため等から祭られて居り、飯田松川沿岸には特にこれらの碑が多い。

飲用水や灌漑用のために祭ったものは、伊賀良井取入口を始め、分水地点に多数見受けられる。また一色や名古屋地区の簡易水道設置の際のものもある。

松川は暴れ松川といわれ沿岸はしばしば大水害に襲われたことから水難防止を願って祭ったものが多い。天伯の松川大明神、これは元若宮にあったもの。天伯の祭神の一つ九頭竜権現。下茶屋の水神宮、西鼎二、三丁目の水神(天保期)。同四丁目の水神等。また水天宮は西鼎の二、三丁目と下茶屋、共に明治二十二年(一八八九)。下茶屋の碑は水神と併刻。松川プールしたの籠大神碑、大正十三年(一九二四)がある。祭神は天水別神で分水を司る神。ここでは堤防を守ってもらうことを願って祭ったという。これらの碑の多くは大水害の出た直後に建立されたものが多く、二度と水害に逢わぬ様にとの痛切な願いがこめられている。―『鼎町史』下巻一〇六八頁・

鼎町史刊行委員会・一九八六)

(ロ) 水神 (下伊那郡喬木村)

水難から免れるために祭ったものであり、天竜川、小川川、加々須川筋に多く、家庭の井戸等に建てられたものもある。―『喬木村誌』上巻八三六頁)

(ワ) 石神松 (上伊那郡中川村大草)

昔、石神松の真下にある天竜川のカマンブチに大きなこいが住んでいた。ある年の洪水に、ふち(淵)の外に跳び出たかわいて死んでしまったので、里人が死がいを今石神の地にあつく葬り、塚を築いて水神としてまつたという。―『長野県史』民俗編・第二巻(二) 五七八頁・長野県史刊行会・一九八九)

(カ) 津島講 (下伊那郡清内路村)

素盞鳴命を祭り、津島神社は神仏習合で牛頭天王といわれ、水の神・悪疫退散の神として祀られてきた。川裾橋の橋場などでは、水天宮の石碑を祀り、春秋の道普請や橋の修復の時、神七五三飾りをして供物を供えた。―『清内路村誌』下巻三五二頁・清内路村誌刊行会・一九

以上見てきたように、洪水を防いだりするために祭られた水神様には実に様々なものがあります。洪水は荒れるというので、荒れ神の素盞鳴命を祭ることがなされました。

また、この地方で広く見られるものに天伯があります。この神の実態はよくわかりません。秦阜村では天白社（天伯社）の祭神は、天棚織比売命や瀬織津姫で、いずれも七夕祭りの屋祭りに因む祭神だとされています。また、河童を祭るものもあるようです。鼎町では九頭竜権現も天伯の一つだとされています。

水神には九頭竜権現・水速女命・弁才天・水天宮・罔象女神・戸隠神社などが祭られていると言われています。このうち弁財天については既に触れました。

このほか名前を持たない、池の神社や池の明神もありますし、鯉の死骸を葬った塚も水神とされています。多様な神々が、洪水などを防ぐ水神として祭られていたのです。

天竜川流域の洪水頻繁地や、深い淵などには弁財天や天伯社などが祭られています。そのほとんどには何のために祭られたかという由緒が伝わっていませんが、本来は水を治めるために勧請された可能性が高いのではないでしょう

か。

「経塚」

日本では、神と仏との間にほとんど区別がありません。先程も水神のなかにも日本古来の神もあれば、インド起源の神もあります。そこで次に仏教と治水との関係について少し触れてみたいと思います。

(三) 経塚（伊那市東春近 六軒屋）

六軒屋の涯ぎわに、小さな塚が点在していて経塚と言っていた。昔、洪水を防ぐために読経して水難除けを祈願し、経を埋めたところという。以前四十八ヶ所あったというが、今は開墾の際崩されてその数が少ない。――

〔長野県 上伊那誌〕第五巻民俗篇上―四二五頁・上伊那誌刊行会・一九八〇、この伝説は『東春近村誌』一〇三六頁・東春近村誌刊行委員会・一九七二にも採録されている）

(夕) 河成の事（伊那市東春近）

車屋から榛原へ上がる段丘のはぶちに、経塚という

ころがある。ここには昔、十二ほど塚があったが、いまはない。伝説によると三峰川の洪水がないように、また、氾濫時には早く治まるように、殿島の人々が経をあげたということである。塚というからには納経も行なわれただろうし、洪水防止のたしかな祭祀遺跡といえる。――『東春近村誌』二二八頁・東春近村誌刊行委員会・一九七二

(レ) 車屋区の水害除経塚(伊那市東春近)

『車屋区誌』によれば「車屋区(東春近)三軒屋坂上に小墳あり。往時三峰川氾濫の際、水害除の祈禱を行ない経文を埋めた所である。一二か所あった。」とあり、現在は段丘の突端に一つ残されている。また、近くに般若畑といわれる地があり、これも水害除に大般若経を転読した所だという。――『歴史の道調査報告書 天竜川』四六頁・長野県教育委員会・一九九〇

(ソ) 安永八年(一七七九)の『木の下陰』

三峯川のうち山田、小原、芦沢、出会いの島を、大般若島といふ、古へ般若経を納る故に名付く、いかなる洪水にも流れずといふ――『葦原拾葉』第九輯一〇五頁・

名著出版社・中巻二八〇頁)

(ツ) 般若島(伊那市 下新田)

本村の坤に当る。下新田の南方、三峰川の下流に至り、碌鍛たる河原に、般若島と称する平地あり。往古より洪水ありと雖も、今に此の地の流失したるを見ず。斯の所以を原るに、今を去る事二百五十余年前、寛永元年(一六二四)慶芳院不源と言ふ者あり、大峯山行者にして斯の地に堂宇を構へたり。然るに正保四年(一六四七)五月大洪水の時節、將に流れんとするに当り、般若経を転読して、其を免るる事を得たり。故を以て般若島と名づくと言伝ふ。――『長野県町村誌』三四六三頁・長野県町村誌刊行会・一九三六、郷土出版復刻・一九八五)

ここまでの伝説は一連のものです。基本的には、洪水を防ぐために読経して、お経を埋めた経塚があったということです。般若島という地名もこれに関わります。私達は仏教という、ついつい宗派の違いとか、教義を中心とした哲学的な側面を重視しがちですが、民衆にとってはこうしてお経そのものが災難を除いてくれる特別な力をもつものとして理解されたのです。仏教や神道のマジカルとしての側

面が重視されていたのです。

天竜川の水難も、お経の持つ特別な力によって免れるのではないかという考え方で、きわめて注目されます。このような水難を避けるための経塚は各地に作られた可能性があります。

「堤防の上の木」

災害に対処するための手段の一つとして、神や仏、お経の力を頼むことがあったことを述べてきました。それに関連して私気が気になっているのは、堤防などに植えられた木です。

(ネ) 石神松（上伊那郡中川村）

石神は農の神、左宮司であるらしい。また伝説によると往古、天竜川の深淵でちょうどこの下にある釜ん淵（正しくは含満の淵といって本来は仏道修業の場であり、ほかにこの名称の淵が諸所にある）に大きな鯉がすんでいた。世人はこれを天竜の主、九頭竜（大蛇とも）の化身と言っていたが或る年の洪水に、淵の外に跳りでて渴いて死んでしまったから、里人が今の石神の地に塚を

築いて、死骸を厚く水神として祀ったとも言う。また、ある人が陣馬形山に登って天竜川を眺めたところ、蜿蜒とって遠州の方へ流れていく川のようにすが、竜が天へ向ってのぼっていくのに似ているので、昔は天流川と書いていたのをそれからは天竜川と書くようになったとも伝えていのに似ている。

またある老媪は「この石神を息をしなくて七廻りする」と青坊主が現われてくるのが見えるそう」とも言っている。

また元和の頃（一六一五〜二四）、常泉寺に一人の山伏が寄寓していたが、その法力が頗る顕著であった。その頃しきりに天竜川が氾濫してこれに悩んだ農民は、この行者に頼って水難除の祈禱をしてもらった。行者は熱心に経を誦し二十一日間祈願を続けたが、満願の日に精魂尽きてついにたおれた。彼は死に先立ちこの水神に手植えの松を手向けたが、これが即ち今の石神の松だとも伝えられている。だとすると樹齢は三五〇年内外になるわけである。——『南向村誌』七〇〇頁・中川東公民館・一九六六

(ウ)と同じ伝説です。この伝説の前半部分は既に第一章で扱いました。問題は後半の部分です。元和の頃に常泉

寺に一人の山伏が寄寓しており、その法力が顕著だったので、天竜川が氾濫して困っていた農民は、この行者に頼って水難除の祈禱をしてもらった。行者は熱心にお経を唱えて、二一日間祈願したが、満願の日に精魂尽き果てて倒れた。彼は死に先立って手植えの松を手向けた。これがすなわち今の石神の松だということです。

近世以前には多くの山伏がおりました。山伏は生産活動には従事していませんから、常泉寺に寄寓していた山伏は、結局のところ地域の村人によって養われていたのではないのでしょうか。村人が彼の生活をみていたのは法力に期待してでした。そして彼に村人が求めたのは、天竜川の氾濫を治めることだったのです。山伏は治水の祈禱をする過程で死んでいったようです。先に洪水を防ぐ経塚について述べましたが、この山伏はそうしたことをしていた人の一端を伝えているのです。おそらく中世や近世にあれだけ多くの山伏をはじめとする宗教者がいたのは、その教義が理解されたからではなくて、彼らが持つと信じられた特別な能力のためだったのではないのでしょうか。すなわち彼らはこの世とあの世との接点に位置し、神々などに人間の意志を伝えたり、働きかけをする者として期待されたのです。

そうした山伏が、水神への手向けの松を植えたのが今の石神の松だといえます。手向けというのは「神仏に幣（ぬさ）など供え物をする」こと。また、その供え物「『日本国語大辞典』第一三卷一九七頁・小学館・一九七六」のことです。しかし、ここではその松自体が石神とされています。

堤防などを作った際には、そこに水神などを勧請しました。これは神の力によって、水害を防ごうとするものです。ここで水神に松を手向けたのは、松を通して水神が来ることを期待していたからです。それなら、この場合、神様はどのようにしてやってくるのでしょうか。私はこの松が神社の榊や正月の門松と同じ様に、神のやって来る目印であり、それ自体が神とされたのではないかと考えるのです。

(ナ) 一本松の伝説（上伊那郡辰野町）

小野村の南方新田という所に、一本独立している松があった。田甫中の三州街道の道脇に、現在では枯れて切られてしまったが、伝説だけは残っている。

今を五〇〇年ばかり遡る当時、小野川は今の流れと場所を変えているが、小雨でさへ川は氾濫して田畑を荒す事が度々であった。それで農民の困難は一通りでなかったそうだ。時の庄屋が発言した。これはきつと何か

が祟っているに違い無いといって、これを鎮めるために

一本の松を植えたそうだ。処がそれから川も氾濫する事も無く豊年が続いたという（これは多分防岸のために植えた松が一本だけ残ったのではないかと思う）。それから現在に至ったのだが、年老いて枯れてしまつて後を絶つた。昭和十年に切つたが、木の中には水が五斗も入つていた。切つた人は伝説を信じていた人だったので、また再度切つた後大水が出たので気をやんで床に就いた。しかし十日ぐらひして回復したが、村でもこれに対して後を絶たない様に植えるという話があるが、今だに植えない。―『辰野町誌』近現代編一一二頁・辰野町誌刊行委員会・一九八八）

この伝説では、小野川が小雨でさえ氾濫して田畑を流した。そこで庄屋が何かがたたっているに違いないということで、堤防の上に一本の松を植えた。それからは川が氾濫することがなくなつたといひます。

前の伝説からしても、この松は治水のために植えられたものといえるでしょう。たたりをもたらずものを制御することのできる力を松そのもの、もしくは松を通じて得ようとしたわけです。ここでの松は水神様が飛び移ることのできる目印、あるいは神の宿り木としての効果が期待された

ものと考えられます。

「開発と水害対処」

長い間日本人の生活の糧としてあつた農業を行うためには、農地が必要です。人口が増えるとそれだけの食料を用意しなくてはなりませんし、各家などがより豊かになるためには新田の開発などが必要になります。これは直接治水と関わることです。これまでは、ごく大ざっぱに水害をいかにして防ごうととしていたかということで、日本人の精神的な面を見てきましたが、もう少し積極的に新田開発などにあたつて、洪水などをもたらす神とどのように対応したのかを考えてみましょう。

(二) 貝暮ヶ淵と埋立工事（飯田市川路）

「大堰」の工事によって西河筋の流れが遮断され、旧河筋は大部分次第に新田化していったが、壁くる地籍より奥手前にわたる河床一帯は窪地であつたため干上がり、河水や雨水がたまつて一大池沼と化し、紺碧の色も濃く満々と水をたたえて出現したのが後世まで伝説的に伝承されている貝暮ヶ淵である。池名については何故に

「かいぐら池」、「かいくらが池」という名称が起ったかは不明であるが、現実存在したことは間違いない事実である。

この神祕をたたえ蒼々とし水底に大蛇が住むと噂され、幾多の伝説、怪談をうんだ貝暮ヶ淵もいよいよ終りを告げる時がやってきた。元禄七年（一六九四）春、かねてよりこの池の存在を何の価値もないと考えた当時の竹佐役所は、下川路村の時の庄屋文太夫並びに組頭岡右衛門を呼び、貝暮ヶ淵を埋立て新田開発せんとする意向を伝えた。（一説には文太夫より埋立てを願ひ出たともいわれる）文太夫は早速これを受諾したが、このことが村内に伝わるや村人の驚きは一方ならぬものであった。何はともあれその池底に大蛇が住んでいると信じ畏怖している村人は、池を埋立てるなどまことに大それたこととその崇りを恐れて逡巡したが、それをなだめて、後日の崇りがないようにといういる相談の結果、開善寺大和尚の発案により「人柱」を池底に沈めて犠牲にする案が立てられた。この人柱は生きている人間ではなく、墓場に立てられていた墓石をもって人柱代りに池に投げ入れて犠牲にし埋立てを行なおうとしたものであった。

これによって近隣に名高かった貝暮ヶ淵は埋立てられ

たがその埋立方法は駒沢を切り込み、更に近くの高所の土砂を運搬して埋めたと伝えられている。かくて貝暮ヶ淵は正保二年（一六四五）、脇坂侯大普請によって出現してより元禄七年の埋立てに到るまで、その存在期間はおよそ五〇年、その神秘的な池沼の姿をこの世に現わしていたわけである。―『長野県飯田市川路村誌』一九四頁・川路村誌刊行委員会・一九八八

現在の飯田市川路に江戸時代、天竜川の旧河道で貝暮ヶ池と呼ばれる池がありました。この池には大蛇が住むとされていたが、元禄七年（一六九四）に埋め立てて新田が開発されることになりました。村人は大蛇のたたりを恐れたが、開善寺の大和尚の発案で、人柱を埋めることにしました。それも生きた人間ではなくて、墓石を人柱のかわりに池に投げ入れて、埋め立てをすることになったのです。結局これが成功して貝暮ヶ淵は新田になったというのがこの話の筋です。

ここで注目されるのは、実際には墓石が代わりになったけれども、新田の開発にあたって人柱をすれば良いという考え方があったことです。ここでは人柱が竜に捧げられれば、淵を埋めて新田開発をしてもたたりがないと考えられたわけです。ここでは人間の力ではどうにもならない竜を

押えるためには、人間にとっても大事な人間の命を捧げるしかないだろうという理解があったのではないでしょうか。ところがこの時には、墓石が代わりに用いられているのです。つまり、もう実際に人間の命ではなく、そのかわりのものでも良いのだという考え方です。墓石が特別な力をもつものとして意識されていたとしても、実際に人を埋めなくてもよいのだという考え方は、大きな意味をもつと思います。そうしてこのような考え方は近世的なものではないでしょうか。

〔洪水になった時に〕

(ム) 明神様の瀬分け鎌 (下伊那郡豊丘村)

大昔、田村の明神様は字舞台というところにあります。大きな森があって、天竜川の瀬がすぐ森の下へ打ちよせるところでありました。天竜川に大水が出て瀬が代ると、田村の新田はおし流されてしまいます。大雨が降りつづき大水が出ると、村中の人が明神様でお祭りをし、神様から瀬分け鎌をいただき、大ぜいの若連中が、この鎌をもってはだかになって天竜川へとびこみ、瀬分け鎌を引くとたちまち瀬がかわって向うの方へ流れ村が

たすかりました。このあらたかな明神様と、池野氏の八幡様と合せまつることになって現在の諏訪神社のところへうつりました。―『豊丘村誌』上巻七一―頁・豊丘村誌刊行会・一九七五)

田村の明神様に関係して、天竜川に大水が出て、瀬が変わると田村の新田は押し流されてしまう。そこで大雨が降り続き、大水が出ると、村中の人がお祭りをして、神様から瀬分け鎌をいただき、大勢の若者連中がこの鎌を持って天竜川に飛び込み、瀬分け鎌を引くとたちまち瀬が変わって、向こうの方へ流れるようになり、助かったのだと言います。

瀬分け鎌が洪水のときに水の流れを変える手段として利用されたこととなります。それではこの背分け鎌とは一体どのようなものなのでしょう。それを知るために、次の伝説を見てください。

(ウ) 中郷の流れ宮 (下伊那郡上村)

中郷の分校だった所の近くに、大きな岩があって、諏訪明神を祭ったんだに。いつのことだったか、大洪水にあって流されちゃったことがあるんな。そうして、今の諏訪宮ん所まで流されちゃったもんで、それ以後、

中郷に祭ってあった明神様ん所を流れ宮っちゅうようになつたんだに。諏訪宮には、なぎがまが二本お祭りしたつて、上町とその付近の人たちが、御射山の祭りとして八月二五・二六日にお祭りをするんな。

また、水害に出あつた時にゃあ、祢宜様がなぎがまを持って川へ行つて、川すじをひくと、川すじがその通りなつたんだに。わしら（古瀬良男氏・古瀬右京氏）が若い頃に、一度やったことがあるけど、ちいっとは川すじが変わつたに。―（『南信州・上村遠山谷の民俗』三四〇頁・上村民俗誌刊行会・一九七七）

この場合、明神様とは諏訪大明神のことであり、水害にあつた時には、禰宜がなぎ鎌をもって川へ行き、川筋を引いて川の流れを変えたというのです。ここに出てくるなぎ鎌が瀬分け鎌と同じものであることは間違ひありません。

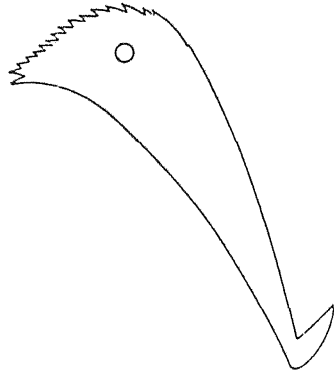
このように、瀬分け鎌、なぎ鎌が天竜川の流域では、洪水に際して瀬を変える道具として用いられたのですが、これまでの説明ではまだ実態は不明です。ところが、安政四年（一八五七）に書かれた『諏訪旧蹟誌』という本に次のような内容が記されています。

信濃国はきわめて風が早いところなので、諏訪明神の社に風の祝という者をおいて、春の初めに深く物に籠っ

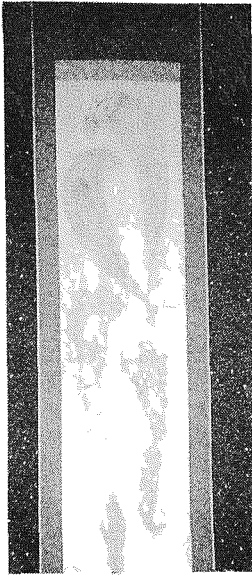
て、百日の間尊重する。そうするとその年は概して風が静かに吹き、農業のために良い。（中略）今は風祝というものはないけれども、風には関係の深い神である。またこの神を祭るには鎌を神幣とする。（中略）下社から七年ごとに一度ずつ、越後の国堺の安曇郡中土村の鎮守の諏訪社に遣わすのは右のようなものである。長さはおよそ一尺五寸（約四五センチ）ばかり、それに下社の祝の姓名と年号を彫り付ける。これは大変古い例で、彼の地の神体とする。伝え聞くのには白鳳の年号を彫つてあるものもあるという。また文政の末に甲斐国堺の深沢村の土中から掘り出したこともあつた。上野国（群馬県）の山中、また甲斐国（山梨県）の西郡辺では、大風のとぎ鎌を竿の先に結びつけ、家のかたわらに押し立てて風を送るという（『復刻諏訪史料叢書』第三巻一〇四頁・中央企画・一九八三）

また、『民間信仰辞典』で石川純一郎は「難い鎌」を次のように説明しています。

長い柄のついた難い鎌。諏訪神社の春秋の遷座祭において難い鎌を奉持する者が先頭に立つ。また、御柱祭に伴う式に山造り役が御柱用材に難い鎌を打ち込む神事がある。これは杉の木に矢を射かける矢立杉、高い木の枝



『諏訪旧蹟誌』に見えるなぎ鎌



小谷村中土の戸土神社のなぎ鎌拓本
(写真：丸山輝子氏提供)

に木鉤を投げかける鉤掛けの習俗の一つで、神意を占うものである。神に祈願をこめた上で、それを投あげ、枝にひっかかれば神意にかなったものとみなされる。薙い鎌は諏訪信仰に伴う風を祈る祭式として各地に行われている。また風除けのまじないとして鎌を竿の先につけて立てたり棟にとりつけたりするのをカザキリガマと称している(『民間信仰辞典』二二二頁・東京堂出版・一九八〇)。

このように、本来諏訪信仰のなかで風切りの薙い鎌として用いられたものが、洪水の瀬を切る道具として用いられたのです。

以上見てきたように、前近代の人々にとっては、水害への対処は主として神や仏の力に頼るものでした。現代人の目から見ると何の根拠もない、効果も疑わしいと感ずるものかもしれませんが、当時の人々にとっては真剣な洪水対策だったのです。それも貝鞍ヶ池の新田開発に、本物の人柱でなくて墓石を沈めたことわかるように、こうした考え方は次第に後退していったことも事実なのです。そして治水の背景に、あまり神様を意識しなくなるという日本人の意識の大転換の時期として、私は戦国時代があったので

はないかと考えています。このことにつきましましては本シリーズの『戦国時代の天龍川』をお読みください。近世になると盛んに各地に堤防が築かれ、現代の私たちの治水につながるものが数多く見られるようになります。天龍川の治水については各地方史類、土木学会編『明治以前日本土木史』（土木学会・一九三六）などが記していますし、本シリーズでも、市川脩三『近世天龍川の治水―伊那郡松島村―』（一九八八）、下平元護『理兵衛堤防』（一九八八）、北原優美編『伊東伝兵衛と伝兵衛五井』（一九八九）、森岡忠一『ものがたり理兵衛堤防』（一九九〇）、市村威人『惣兵衛川除』（一九九一）などがあります。

おわりに

これまで確認してきたように、天龍川沿いには多くの災害に関する伝説があります。災害の伝説をもつ場所は、必然的に過去に災害のあった場所であり、再び災害に見舞われる可能性を秘めています。むしろ災害の伝説が伝わっているのは、過去の人達から私達へ、そして私達の子孫へと託す、「災害に備えよ」というメッセージなのです。一人一人が伝説を大事にして、洪水などに備えるようにしていく必要があるわけです。

それにしても、伝説の世界では水害を起こすのは多くの場合、竜や大蛇です。竜は私達の世界の住民ではなく、私達には統御できません。このことは、災害は人間の能力を越えたところにあり、神々が我々に与えているものなのだという考え方があったことを示します。それでも悪い竜は退治されます。竜の退治は人間の自然への挑戦なのです。そして人間の自然に対する挑戦は限りなく続き、現在も続いているのです。そして今の私達は、災害は防げるものがあり、防ぐべきだと考えています。

大きな流れとしてはその通りであり、災害はもたらされるべきではありません。しかしながら、近代の統御されるべき自然という考え方の進展のなかに、人間は自然を完全に制御できるという思い上がりが出てきてはいないでしょうか。近年の公害問題、自然破壊の問題は、近代文明の行き着いた結果です。地球的規模で環境問題が提起されている今こそ、私達は再度、人間の力ではどうにもならない世界、竜が支配する自然といった意識を、長い間日本人が持ち続けてきたことの意味を問い直してみるべきでしょう。

現在危機に瀕している地球環境は、人間だけのためにあるものではありません。また、現在の我々だけのものでもありません。地球上の全ての生物にとっての地球であり、未来の人間、そして生物にとっても生活していくべき地球なのです。車の廃気ガス問題から始まって、我々が少し我慢することによって、他人、いや地球上の全ての生物に迷惑をかけるのですむことは多々あると思います。当面我々に行うことができるのは自覚と、個人の行動です。未来にむけて各自でできるだけのことはしていかなくてはなりません。

洪水などの伝説は、いかに人間がチッポケなものかを感じさせてくれます。たまには読者の皆さんのように天竜川の洪水の伝説などをひもといで、私達の歴史について考え

てみる必要があると思います。

付記

本書は平成二年度から四年度まで「災害多発地帯の『災害文化』に関する研究」（研究代表者・首藤伸夫）の題で公布を受けた科学研究費重点領域の分担成果の一部です。関係者の皆様に御礼を申し上げます。